

小さな村の物語

山形商工会議所会頭
清野伸昭



土曜の夜、楽しみなテレビがあります。BSの「小さな村の物語イタリア」。イタリアの村で暮らす人々を描き出す紀行番組です。

アルプスの麓の険しい村、黒い森につつまれひっそりと佇む村、切り立つ岩山に挟まれた村、小高い丘の城壁に囲まれた村、海に臨む小さな漁村、雪に覆われた寒村、そこには羊飼い、りんご農家、スーパーの女主人、スキー客のためにホテルを開く一家が暮らし、それぞれに村に伝わる教え、村に残る記憶を守り、年配者をい

たわり、自家製の Pasta、自家製のワインで食卓を囲む日常があり、気候や風土と共存し、その日その日を美しく生きる姿を伝えています。手ざわり、ぬくもりのある人間らしい営みです。温かい気持ちになります。

さて、そこで私たちの今の営みに視点を移してみます。

終戦の年、私は4歳でした。貧乏な時代でした。食べていくのがやっとで、服を買える余裕などなく、私は姉のお下がりの赤衣着物を着せられていました。その写真は今も手元にあります。とにかく父や母、日本人は懸命に働きました。涙ぐましい努力です。社会に活力、歓びがありました。あっという間に世界が驚く経済大国となりました。でも日本人は浮かれたわけではないのですが成長によって失ったもの、忘れ去ったものがありました。気づいてはいたと思います。が、経済サイクルは行くところまでいかなければやめられない。それを真正面から強烈に突きつけたのが東日本大震災、福島原発事故でした。

荒涼とした風景、離れ離れになった家族、地域社会は崩れたままです。当たり前だと思っていた日常が突然消えてしまうという現実を前に私たちは考えなくてはと思います。原発の運転再開論議はその契機です。議論はどうやら「(運転再開しなければ)電力不足に陥ってしまう」「(脱原発を明確にすべきだ)」という供給サイド中心になっているようです。私はその前に需要者、私たち消費者サイドからもっと強力にアプローチすべきと思います。むだな電力を使っていないか、省エネ(技術)ですね。言い換えれば過剰に物に囲まれた生活を見直すということです。

市場経済に翻弄されている人間、その人間のやることに私たちだけではなく、今や大自然も悲鳴を上げているのです。そう簡単なことではないでしょう。でもこの未曾有の震災、原発事故という不幸な事態を大転換の契機にしなければならぬと思うのです。小さなイタリアの村のようにいかに美しく暮らすか、いかに美しく生きるか、そのことを考えています。

山形パナソニック(株) 代表取締役社長